

がないのでわからないが、安政三年のときは緑カ浜(宇部の海岸)で軍事訓練をしているから、そのためとも思われる。

その他の手控

福原氏は萩の城中でいろいろの役職に就いている。萩の重役は月に五日ぐらい寄合日

が決められており、その日は五ツ時ごろに登城しなければならぬ。この他、朔日や節句はほとんどの武士が登城して御目見をしなければならぬ。式日であった。その他、臨時の登城があるから楽ではない。この手控を見ていると、平服で登城したが、御目見があるから城中の記録所で袴に着替えて殿様の前に出仕している例がある。着物もいろいろの場合により着替えなければならないから、とうてい私のようなズボラな奴には耐えられぬ。天保年間の手控には行間の注に着物の色と柄が記されているものがある。栴椰子、利休茶など記載があるから、福原の殿様は色や柄を知っていたことになる。このなかで「水上」とは何か、調べたがまだわからない。

御先祖様の命日には必ず善

提寺の徳隣寺に参詣し、萩から他出する時は御暇乞として参詣し、節句にも御霊社、春日神社、普賢尊、この他に徳隣寺へ参詣している。また、毛利氏の忌日には名代として大照院や東光寺に参詣し、この後、無事済ませたことを城中の記録所へ報告に登城してから帰宅している。

正月は城下町のなかを弁当持参で年始を廻る。元日に登城してから廻るのであるが、福原親後の弘化四年正月六日を見ると、まず天樹院に参詣し、二十九家へ廻りに廻り、夕飯後に七家を廻っている。正月二十六日には五十三家、二十七日には三十九家を廻っている。福原親後は二十代であつてもお疲れであろう。さらに二月朔日と三日にも二、三〇家を廻っている。これは城下のほとんどの家を廻ったことにならないだろうか。これが萩城下の慣例なのか、それとも親後の特例なのか不明であり、この理由が何なのかはわからない。

文化八年三月一日 発駕
九年五月二十二日 帰城

十年三月五日 発駕
十一年五月十九日 帰城
十二年八月二十六日 発駕
十三年六月八日 帰城
となつており、本当に行つたり帰つたりの日常である。この参勤には殿様の一日前を家老が行き、宿場で迎えることになつているから、お付きの衆の苦勞は大変なものである。

夏目漱石と丸善新築披露会

萩の武士も湯本に湯治に行く。一回の湯治が約十五日間ぐらいであつた。湯治に行く前に徳隣寺に参詣し萩に帰つてからも参詣している。また、湯本の大寧寺に参詣しているのは当然であろう。湯本の湯治の途中で俵山に行くことがある。俵山の湯場は三ツあつたようで、福原氏は一番上の湯に入り、中と下の湯場は家臣がはいっている。

木村功

夏目漱石の伝記研究に関しては、すでに荒正人の「増補改訂漱石研究年表」(以下「研究年表」と略)があるが、「研究年表」の中に空白がないわけではない。「研究年表」中、明治四十三年五月九日の項目は、(五月九日(月)、吹田蘆風「新ロマンチズム

いろいろな手をつくしている様子がわかる。遺体は火葬にして遺骨になつて萩に帰つてきた。道中は道中なりの苦勞があるであろう。

の記念行事に参加していたのである。以下、丸善の社屋建築に関して若干の経緯を述べた後、漱石が参加した披露会の様子を紹介したい。「丸善社史」によると、丸善の本店営業所は市区改正事業のため、明治四〇年六月に二二坪を東京市に買収される事になり改築を余儀なくされた。一〇月二二日から工事に着手し、翌明治四一年二月三日に棟上式を行うに至る。この間旧営業所の北隣に仮営業所を設け、明治四一年一月四日から営業を続けた。ところが、一年後の明治四二年一月一日午前四時半頃、隣家の富田合名会社から出火した火事が、仮営業所や近隣数戸に燃え移り、結局丸善は帳簿の大部分と商品のすべてを焼失してしまつたのである。被害額は、当時の金額で(建物が一萬三千元、商品が約十三万円以上に達した)といふ。しかし不幸中の幸いで隣接地に建設中であつた新社屋への延焼は免れたため、一八日には新社屋二階で営業を再開することが出来た。そして明治四三年、災厄を乗り越えて丸善新社屋は竣工し、五月一日に落成式を盛大にとり行った。五月九日には、東京市内の新

聞記者三〇余名が新社屋に招かれ建物を見学したのである。以下は「丸善百年史」上巻に収められた、「中村重久日記」による五月九日の様子である。

五月九日 市内新聞記者(三十余名)ヲ招キ新築建物ヲ一覽セシメ其ヨリ帝國ホテルニ昼餐ヲ供シ記念写真一組及記念紙入ヲ贈ル參會者新聞記者二八三宅(雪嶺)徳富(蘇峰)夏目(漱石)石川(半山)等三十名会社ヨリ小柳津山崎齋藤内田等九名小柳津謝辞を陳へ三宅統テ石川答辞ヲ陳へ次ニ内田重テ謝辞ヲ述へ午後二時三十分散會ス。

この日記中、丸善が招いた「新聞記者」の中に漱石の名が確認できる。この招待については、翌日あるいは翌々日に各新聞の東京版も報道している。例えば「読売新聞」(五月一〇日付)は、以下のようなのである。

●丸善の新築披露 九日午前十時半から丸善株式会社の新築披露会があつた▼先づ同社楼上的の設備及幾千種の書籍を縦覧し正午帝國ホテルの午餐会に導かれた▼卓上先づ同社支配人小柳津要人氏の挨拶あり次いで起つたのは三宅博士である▼

丸善は日本一の書籍会社と云ふけれども日本一にしては書冊数余りに尠きは何が為だ、能く焼太りと云ふ事があるが勢力旺盛ならざる者は反対に焼細りをやるもの也国光社は即ちそれで秀英社は反対に却つて新設備の出来るのは天気のある為だ丸善も斯うあつて欲しい▼聞く小柳津君は元武士也としからば茲に武士氣質を出して寧ろ丸善の一部分を図書館とし之を解放されては如何と例の口調で或は皮肉り、或は揶揄す、▼次で石河幹明氏は丸善は今日此盛大をなすも茲に至るには辛苦艱難の頗る大なるものがあつた、▼嘗ては書店の傍銀行を営んでゐたが慶應義塾の預金など支払停止を喰つて酷ひ目に逢つた事があると言ふ▼内田不知庵君、店員を代表して挨拶して曰く、私は勿論丸善も一体に

広告術の拙な方であるが、大方諸君が我々の微力を助けて下されなば書店の繁栄は文明の進歩、国家の利益と一致する訳で、何うか皆様にも機敏に来て載き度いとて、仲々巧妙に広告をした

所々意味のとりにくい所も

あるが、午餐会でのスピーチがどのようなものであつたか髣髴させる。三宅雪嶺の(皮肉)な挨拶を、同席した漱石はどんな顔をして聞いていたのであろうか。

次の「東京朝日新聞」(五月一日付)は、「中村日記」が記載した以外の文学者名を伝えているので、内容的に「読売新聞」と重複する部分もあるが併せて引用する。

●丸善の落成披露会 丸善では、一昨九日午前十時半より市内の新聞雑誌記者並に文士連を招待して落成披露会を催した、定刻に及んで御客様は続続と詰懸る、小柳津社長を始めとして役員連ズラリと居並んで丁重に三階の休憩室に導く、一通り顔が揃ふと小柳津氏先導となつて案内する、電話室には二人の交換手が五つの電話器を忙しうに扱つて居る、四階の物置にはギツシリ洋書が詰まつて居る、三階は事務室で百名余の店員がタイプライターやカード式簿記帳に対して機敏に働いて居る、二階は陳列室で名も知らぬ幾百巻の書冊が新式の書棚の中に金文字の背を光らして居る四階は文房具室や西洋小間

物の陳列品室である、一覽相済みすれば一同の車は帝國ホテルへと飛ぶ、宴半ばにして小柳津氏來賓総代として雪嶺博士の答辞、石川氏の乾杯辞、内田魯庵氏の丸善の來歴談ありて二時半散會、当日の客人は総數三十名の上に出で、蘇峰、漱石、水哉、松魚、秋骨、孤蝶、小波、天溪等の諸文星も見えた、工事は凡て佐藤工科大學助教の設計になつて高さが避雷針の頂まで九十と八尺、工費概算二十余万円に上るさうだ

「東京朝日新聞」の記事の中にも、徳富蘇峰や戸川秋骨、馬場孤蝶、巖谷小波、長谷川天溪といった人々に混じつて、漱石の名前が認められる。この丸善の新築披露会に関しては、漱石自身の日記や書簡といった身辺資料に言及が認められない。しかし上記した中村日記と新聞の記載から、明治四三年五月九日の午前〇時半から午後二時半までの丸善新築披露会に、漱石が出席していた事は明らかである。翌日一〇日は、明治四二年五月一〇日に病没した二葉亭四迷の一周忌追悼会の日である。この追悼会がよく知られている反面、丸善に集つた文学者

達については一会社社の記念行事といふこともあつて、社史の一頁に埋もれるしかなくたのである。

註
① 荒正人・小田切秀雄監修「増補改訂漱石研究年表」昭和五九年六月二〇日、集英社。
② 司 忠「丸善社史」昭和二六年九月一五日、丸善株式会社。
③ 飯泉新吾「丸善百年史」上巻 昭和五五年九月一八日、丸善株式会社。
④ 「学燈」編集室所蔵「中村重久氏日記抄」本文には、姓名の後の括弧内の記載がない。担当執筆者木村毅の補記と思われる。また、

「石川答辞ヲ陳へ」とある箇所、(石川(半山))とされているが、後掲の「読売新聞」の記事では(石河幹明)となつてゐる。「東京朝日新聞」には、(石川氏の乾杯辞)とあるだけで、石川半山か石河幹明なのか、判然としない。

なお末尾ではあるが、貴重な資料を見せていただいた「学燈」編集室に御礼を申し上げます。

なお末尾ではあるが、貴重な資料を見せていただいた「学燈」編集室に御礼を申し上げます。